

ブドウべと病情報第1号

平成24年4月17日
愛知県農業総合試験場
環境基盤研究部病害虫防除室

1 ブドウべと病について

ブドウべと病は、落葉などで越冬し、翌春から初夏にかけて降雨や水滴などでブドウの葉や新梢に伝搬し、気孔から感染します。感染すると、はじめ葉に淡黄色の病斑が現れ（図1）、後に葉裏に白いかびを生じるようになります。果実にも感染し白いかびを生じます（図2）。多発すると早期落葉し、収量に大きく影響します。降雨が続くと、発生量が多くなるので、気象予報に注意して防除を行うことが重要です。昨年多発したほ場では、今年の越冬菌量が多くなっていることが予想されるので、特に注意しましょう。



図1 ブドウべと病の葉の症状



図2 幼果の症状

2 防除対策

- (1) 例年、5月頃から発病が見られます。発病部は伝染源となるので、見つけ次第すぐに切り取ってほ場の外へ持ち出し処分しましょう。
- (2) 誘引などの作業では、風通しがよくなるようにし、棚面の明るさも十分に保てるように管理しましょう。
- (3) 連続した降雨により感染が急速に拡大するので、気象予報に注意し予防散布に努めましょう。
- (4) 農薬散布はかけムラに注意し、特にほ場周辺などかかりにくい部分については、必要に応じて補助散布を行いましょう。
- (5) 昨年秋にサンプリングした愛知県内のブドウべと病菌を調査したところ、ストロビルリン系薬剤の耐性菌の発生を確認しました。ブドウに登録があり、よく使用されているストロビルリン系薬剤は、「ストロビードライフロアブル」（有効成分：クレソキシムメチル）と「アミスター10フロアブル」（有効成分：アゾキシストロビン）です。これらの薬剤は、耐性菌への防除効果が期待できません。現在、耐性菌と感受性菌が混在している状態なので、これ以上耐性菌を増やさないためにも、これらの薬剤をべと病防除に使用することは控えましょう。
- (6) 「ホライズンドライフロアブル」（有効成分：シモキサニル、ファモキサドン）はその一成分であるファモキサドンがストロビルリン系薬剤と同様の作用機構であり、交差耐性を示すとされています。このため、耐性菌に対する効果が低下している可能性があるため、本剤の使用は1年に1回としましょう。
- (7) 農薬によっては、袋かけ前の散布で果粉の溶脱や汚れを生じることがあるので注意しましょう。
- (8) 農薬の散布にあたっては、ラベルの表示事項を守るとともに、他の作物や周辺への飛散防止に努めましょう。